

合いながら、やうやく三十八度線に着き、北の海州港へ着く。

そしてここで一か月間ソ連軍に攔まり、飛行場整備で働かされることになったが、子供達はご飯をたくさん食べられると喜んだ。四月二十日夜陰に乗りまたもや脱出、海は干潮を利用してドロ沼のような足元を用心しながら歩く。

五十メートル間隔で照らされる燈光器と警備の声におびえ、満ちてくる海水になやまされながら三十八度線の南側についたとき歓声が上がった。それから青丹から汽車で、すし詰めのまま開城へ、京城では西本願寺へ泊めて貰ったが、これも満員の難民で、清津の人々と一緒にした。昭和二十年十一月八日博多港へ着いたときの嬉しさは言葉に現すことは出来ません。福岡の護国神社に一泊、里の久留米に落付いたとたんに倒れ伏したままでしたが五日ほどで起き上がることが出来ました。今日までの頑張り、強くたくましい女が一人、七二才、書の道で暮らしを立てて生きております。戦死した主人と二度目の主人の位牌を守って生きていきます。

残酷行状記

大分県 阿部 美代子

昭和二十年八月十日早朝、「艦砲射撃が始まる、ソ連兵が上陸してきます、早く駅に集まってください」と大声で叫んで通る声にびっくりした。庭の防空壕まで荷物を取りに行こうと思うが、足がすくんで動けない。私どもの鉄道官舎は、海を見渡す良い地形の丘に建っている。海からの射撃だと一ぱつで吹つとぶ。B 29がきたときに、石油タンクが攻撃され、爆弾が雨のように降り、黒煙りをあげて燃えさかる光景を見ていたので恐ろしいばかり。

「日本は負けている、近くには軍隊はいない、軍人の家族はみんな内地に帰ってしまった」この噂は早くに聞いていたが、ほんとうだったな、と感じました。とにかく、命あつての物だねだと母と妹と私、三人で駅に向かつて走った。

北朝鮮咸鏡北道・清津駅には、もう大勢の人が集まっており、用意されていた貨物車に立ったまま乗りこんだ。一時的に避難するのだと思って、三人手を取りあっていた。父は勤務中なのでいない。輪城平野をまわり、南へ向かって、ひた走りに汽車は走る。途中に海辺を通る。「海岸からの攻撃があるかもしれない、注意してください」といわれても、汽車の中では、どうすることもできない。そして元山についた。星空を仰いで、草の上で寝ることは初めてであった。次の日、ぼた靴を履いた大きなソ連の兵隊が通るのを見た。恐ろしかった。

八月十五日、日本は負けた、戦争は終わった、しかし、私たちは、清津には帰れない。家に帰ることはできないのだと皆は話していた。戦争が終わったことはうれしいけれど、家はない、着のみのまま、これからどうなっていくのか、と思うとガックリしてしまった。

清津には帰れないことになったので、京城に向かうことになり、また貨車に乗った。ギュウギュウにつめあって寝る。子どもの大・小便が顔や頭に降ってきて、どうすることもできない。

父は工場のあと始末で、引揚げの時間におくれ、清津から羅南まで歩いたとのことで、驚きであった。父の汽車は途中で何度も攻撃され、停車し、たいへんな時間がかかったので、汽車の音を便りにいっしょうけんめいに歩いたという。そして、父と京城で家族は再会した。京城では、朝鮮人の鉄道員から食糧をもらい、テンプラをし、大豆でモヤシを作り、作ったのではなく、大豆ばかりなのでモヤシができてしまった。モヤシばかり食べた。

私どもはおとなばかりなので、引揚げはあとまわしになった。とりあえず、父のふるさと、北海道郡の幸崎の家に戻ることにして釜山から船に乗り、内地へ向かった。そのときは、もうへとへとなり、乞食のようであった。